様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２７９８

研究課題名（和文）日本語学習者の留学における語用論的能力の習得に関する研究

研究課題名（英文）Interlanguage Pragmatics in Japanese during Study Abroad

研究代表者
ボイクマン　総子（椙本総子）（Beuckmann, Fusako）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：５０３７０９９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、円滑なコミュニケーションを達成するために必要とされる語用論的能力の習得に、第二言語環境が効果をもたらすのかを実証的に検証するものである。本研究では外国語環境と第二言語環境という学習環境の違いに対し、「断り」をめぐる語用論的な特徴、及び、習熟度の違いによる「断り」に関する語用論的能力の発達の解明を目的とする。
　検証の結果、日本語能力が上がるにつれ日本語母語話者の使用に近づく語用論的能力と習得しづらい語用論的能力があること、第二言語環境であっても習得されやすい語用論的能力とされにくい語用論的能力があることがわかった。習得されにくい語用論的能力は、明示的に教授する必要があると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本語学習者を対象とした学習環境をめぐる中間言語語用論研究は、横断研究、縦断研究とも数が非常に少ない。そこで、本研究では、まず、外国語環境の学習者の「断り」の語用論的能力について日本語レベルに応じて分析するという横断研究を行った。これに加えて、同一の学習者の語用論的能力の発達を縦断的にも調査し、分析考察した。
　したがって、本研究の成果は中間言語語用論、及び、学習環境に関する日本語学習者の言語習得研究に貢献するものと考える。さらに、本研究によって得られた、習得しやすい能力としにくい能力の知見は、日本語の話しことば教育のシラバスと教育方法、学習環境の整備に重要な示唆を与えるものとなる。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to verify empirically whether a second language environment is effective in acquiring pragmatic knowledge required to achieve smooth communication. We analyzed refusal data in order to clarify the pragmatic knowledge and the development of pragmatic knowledge on refusals in different proficiency levels1 by comparing between a foreign language environment and a second language environment.
　Results showed that as the L2’s proficiency level advanced, the usage of pragmatic knowledge by L2 learners became similar to by NS. However, it was also evident that there are some pragmatic knowledge, which NS frequently use, but L2 learners, even advanced one, hardly use. Moreover, there are some pragmatic knowledge which is hard to acquire even for L2 learners in a second language environment. The results suggest that some pragmatic knowledge which is hard to acquire, need to be taught explicitly.

研究分野：日本語教育

キーワード：第二言語習得　中間言語語用論　断り　第二言語環境　外国語環境

１．　研究開発当初の背景

近年、中間言語語用論研究において、学習環境に関する研究に注目が集まっている。語用論的知識は、使用言語コミュニティにおける社会・文化的文脈と密接に関わっており、学習者は当該文脈における込み入った相互作用を管理する能力を習得することが望まれる。なぜなら、この能力は、学習者が目標言語の社会的文化的規範に自らの意図に反して違反してしまうことで不利益を被る可能性を避けるために必要なだけでなく、自らが望む社会的なアイデンティティを保ちつつ、効果的に会話の目的を達成することにつながる能力だからである。

しかしながら、日本語学習者を対象とした学習環境をめぐる中間言語語用論研究は横断研究、縦断研究ともに数が非常に少ない。そこで、本研究では、この領域の研究の一つとして、特に話し相手の face をより直接的に脅かす危険性のある発話行為である「断り」に注目し、語用論的な発達過程を分析する。

２．　研究の目的

本研究の目的は、外国語環境と第二言語環境という学習環境の違いに対し、「断り」をめぐる語用論的な特徴、及び、習熟度の違いによる「断り」に関する語用論的能力の発達を解明することである。

３．研究の方法

データ協力者は、都内Ａ大学の半年または１年の交換留学生で、年齢は 19 歳から 26 歳で、過去の日本滞日歴は全員１ヶ月未満で、調査は日本での留学が始まってから２週間以内、半年後、１年後に行われた。協力者レベルと人数は、初級後半 13 名、中級 19 名、上級 13 名である。また、比較対照とする日本語母語話者（NS)は、過去５年以上首都圏に住んでいる学習者と同じ A 大学に在学する学生 62 名（男性 37 名、女性 25 名）である。

発話行為の場面は、「勧誘に対する断り」と「依頼に対する断り」で、会話の相手は、「週５日仕事のときだけ会うアルバイトの上司（以下、上司）」「部活の仲の良い先輩（以下、先輩）」「授業のときだけ会う同学年の友人（以下、友人）」「仲の良い同学年の友人（以下、親友）」とし、表１の組み合わせで状況を設定した。「+」「−」は想定される心的距離（親疎）と社会的距離（上下）の有無である。

表１　発話の状況と相手、心的距離、社会的距離

No.	発話行為	状況	相手	心的距離（親疎）	社会的距離（上下）
#1	対勧誘１	送別会参加の誘いを断る	上司	+	+
#2	対勧誘２	誕生パーティーの誘いを断る	先輩	−	+
#3	対勧誘３	ラテン語を一緒に履修する誘いを断る	友人	+	−
#4	対勧誘４	誕生パーティーの誘いを断る	親友	−	−
#5	対依頼１	残業の依頼を断る	上司	+	+
#6	対依頼２	引っ越しの手伝いの依頼を断る	先輩	−	+
#7	対依頼３	試験のためのノート貸与依頼を断る	友人	+	−
#8	対依頼４	引っ越しの手伝いの依頼を断る	親友	−	−

実験の形式は、英語で書かれた状況を与え、その状況に応じた発話を音声で聞き、実験協力者はその音声に応答する形で自らの発話（断り）を述べるという Oral-DCT である。

分析対象は、断りの主要部の展開パターン、及び、断りの主要部に見られるヘッジである。尚、断りの主要部とは、「不可」ないし・及び「理由」を含む発話文のことをいう。

４．研究成果

日本語学習者の発話をレベル別に分析した結果、以下の点が明らかになった。

【主要部のパターン】

(1) NS に最も多いパターン「理由→不可」は、日本語レベルが上がるにつれ多くなる。

(2) 「不可のみ」述べるパターンは、初級→NS→中級→上級の順に少なくなる。

【主要部のヘッジ】

(3) 日本語レベルが低いと、「できません」「むずかしい」など、ヘッジなしの言い切りで不可が表現されることが多い。しかし、日本語レベルが上がるに従い、主要部に現れるヘッジの数と種類が多くなる。

(4) ヘッジの出現には日本語レベルに応じた順序がある（以下の図１参照）。

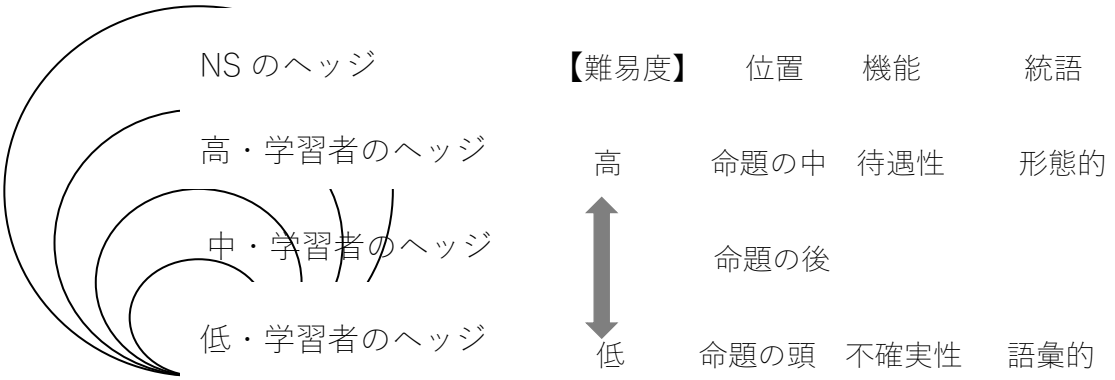

図１　言語能力、位置、機能、統語とヘッジの習得の関係

(5) NS は使用するが上級になっても使用されないヘッジがある。

【理由の表現】

(6) 日本語レベルが上がるにつれてノデ、テの使用が増え、逆に、言い切り（＋終助詞）は次第に減る。一方、カラの使用は中級にかけて上昇し、上級で減る。

(7) NS に比べ、言い切り（＋終助詞）の使用割合が上級においても多い。

(8) カラとノデの相手に対する使い分けは、上級においても行われていない。

主要部のパターンを見ると、当該の言語行動の目的を効果的に達成すること（断りという目的を効果的に達成すること）と、相手との関係を良好に保つという２つの指向性のうち、前者の指向性は初級の段階から達成されていること、そして、後者の指向性は言語能力が発達するにつれて徐々に習得されることがわかる。同様に、ヘッジの数と種類が日本語レベルが上がるに従い増えていることから、前者の当該の言語行動の目的を効果的に達成することに関する表現は習得段階が初期の頃から達成されるのに対し、後者の相手との関係を良好に保つことに関する表現は言語能力が発達するにつれ徐々に習得されると言える。

そして、このことは、日本語学習者の発話を縦断的に分析した結果においても、同様の結果が得られた。このことから、本研究の分析対象である断りの主要部の展開パターンとヘッジにおいては、学習環境よりも日本語能力のほうが習得に与える影響が強いということが言える。

日本語能力が上がっても学習段階に応じた語用論的能力の習得の順序があるということ、そして、日本に滞在する期間が長くなってもその語用論的能力の習得は日本語能力と関連があり、日本語能力が高くても習得されにくい展開パターンや表現があるということは、そういった習得されにくい語用論的能力は、明示的に教示される必要があるということを示している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①ボイクマン総子（2019）「日本語の『断り』における語用論的能力の発達」E*ruditi: The CGCS Journal of Language Research and Education*、査読有、vol.3、 pp.X-X.

②ボイクマン総子・森一将(2019)「スピーチレベルと心理的距離・社会的距離」『間谷論集 13』日本語日本文化研究会、査読有、pp.1-22.

③Fusako Beuckmann and Mori Kazumasa (2018) Analysis of Speech Level in Japanese: Power and Rank of imposition on Request、 Invitation、 and Apology between Close Participants. *The Japanese Journal of Language in Society.* 査読有、Vol.21、 No.1、 pp.225-238

④ボイクマン総子・森一将(2018)「基調スピーチレベルの選択とスピーチレベル・シフトの発達―中級日本語学習者と上級日本語学習者の比較―」『間谷論集 12』、日本語日本文化研究会、査読有、pp.1-25

⑤ボイクマン総子・森一将(2017)「日本語学習者のスピーチ・レベルポライトネスの発達―第二言語環境における英語母語話者の依頼、勧誘、謝罪の発話行為を対象に―」『社会言語科学会第 40 回大会発表論文集』、社会言語科学会、p30-31

〔学会発表〕（計３件）

①ボイクマン総子（2018 年 8 月 4 日）「日本語の学習段階による『断り』表現の発達―中間言語語用論分析を通して―」、ヴェネチア日本語教育国際研究大会、於）カ・フォスカリ大学

②ボイクマン総子・森一将(201712 月 18 日)「スピーチ・レベルと上下親疎の関係-断りの分析をもとにして-」日本語用論学会第 20 回大会、於）京都工業繊維大学

③ボイクマン総子・森一将(2017 年 9 月 16 日)「日本語学習者のスピーチ・レベルポライトネスの発達-第二言語環境における英語母語話者の依頼、勧誘、謝罪の発話行為を対象に」第 40 回社会言語科学会研究大会、於）関西大学

6. 研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。